



TITLE:

コロンブスの航海について

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. コロンブスの航海について. 天界 1924, 4(45): 353-356

ISSUE DATE:

1924-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160171>

RIGHT:

# コロンブスの航海について

山本 一 清

一

コロンブスのアメリカ発見といふことは誰知らぬ者も無い有名な事實であるが、それで居て、コロンブスの傳記にも又其の航海についても未だ世に知られてゐない事が可なり多い近頃、「コロンブスの航海日誌」<sup>ミ</sup>といふものが英語で出版された。但し、此の日誌<sup>ミ</sup>いふのも、コロンブス自身が筆を取つて書いた原著ではなく、むしろ、抄録なのだが、可なり精しく、コロンブス自身の言葉をひいたりして、當時の事狀を表はしてゐる。日誌の原著は一度バルトロメ・デ・ラス・カザス<sup>ミ</sup>いふコロンブスの伴侶の手に渡つたのだが、後に紛失して、只此のラス・カザスの残した抄録が一七九〇年に古記録中から発見され、こゝに英文<sup>ミ</sup>なつて現はれたのである。

コロンブスの時代は所謂天動説の信じられてゐた時代で、地面は動かずに、只、天の日月星辰のみが日々回轉するのだと總ての人は考へてゐた。しかし、幸ひにしてギリシャのヒパルコス以來、地面が球形であることは知られてゐた。それに第十三世紀頃、イタリーのマルコ・ポーロが支那に遊んで、

歸國後其の見聞記を發表した中に、

「世界の極東にジバング<sup>ミ</sup>といふ金銀財寶の満ちた國がある」  
 「いふこゝを書いたが爲め、それから後は、歐洲の人々が一般に此の「東の黄金國」に憧<sup>ミ</sup>がれを持つてゐなければ、」世界の端<sup>ミ</sup>で「までいふ長い旅行の必要が彼等の望みを夢にしてしまつてゐたのである。ジバング<sup>ミ</sup>は言ふまでもなく「日本」<sup>ミ</sup>であつて、我が國が世界に紹介されたのは此れが最初であつた  
 ところ<sup>ミ</sup>が。

「世界が球いものならば、極東へは、また、西の方からも行ける筈である」

こゝ、當時の天文家たちが考へ始めたのは、尤も至極なこゝであつた。恰も、十五世紀の末、コロンブスの友人トスカネリ<sup>ミ</sup>いふ天文家が、イタリーのフィレンツエ町に住んでゐた。

コロンブスの息子<sup>ミ</sup>ドン・フエルナンドに據れば、父コロンブスは此のトスカネリと交はつて、天文上の色んな智識を受けたばかりでなく、時々は例の「西への航海」の空想を聞かされてゐたといふ。トスカネリがコロンブスへ書き送つた一四七四年の頃の或る手紙の中にも

「東の邦にあるこゝ一般には思はれてゐる　　が西にもあるこゝ  
 いつたつて、別に不思議でも何でも無い筈ぢやありませんか  
 東へへへへ行つて、東の邦に見るものは、又、西へへへへ行  
 つて、やはり、西にも同様に見られる筈なのですから……」

こうした事を、今少し好く貴君に了解して頂くために、私は自分で今までに研究して見た事の結果を書きませう。私が言ふ其の島々といふのは、外國のあちこちと通商する商人たちの住んでゐる所で、港には、世界中の何の港よりも多くの外國船が常に来てゐます。……國全體は大變に廣く、人口も多く、澤山の小國や小州に分れてゐますが、之れ全體を治める王様があります。王の『王の王』といふ意味で大カンミ名乗つてゐます。云々。」

又、別の手紙には

「貴君が御出でになれば、きつと、廣い國々、大きい町々、富み榮えた諸々を御覧になるでせう。そして、貴君の御訪問は、その遠方の王侯たちに大きな歡びを齎らすでせう。又、彼等ミ吾々クリスチャン國ミの間には交通の道が開け、吾々の正教と藝術の傳達が行はれることになりませう。」

かうして、トスカネリは、しきりにコロンプスの熱心を促した。

始め、コロンブスはポルトガル國の名を以て遠征に出る筈であつた。しかし、遂に事實はスペイン國王の保護によつて行はれた事から見て、こゝに、コロンブスの遠征の目的の他に尙一つ在つたやうにも思へる。何故とすれば、彼れは日誌の中に

「自分は、今回の遠征より得た利益を、聖都エルサレム征服

の費用に捧けませうと陛下に申上げたたら、陛下は喜んで之れを受け入れやうと約し給ふた」

と書いてゐる。即ち、之れで見ると、歐洲では十字軍の壯舉を繰返して、基督の聖墓を回々教徒の手から取り返さうといふ希望を絶つてゐない時代で、しかもスペインの朝廷では費用の出所を心配してゐた場合であつたらしい。尤も、果して、コロンブスの遠征より得た利益が十字軍の方へ用ゐられたか何うかは歴史に明らかでないが、それでも、コロンブス其の人の筆によつて慫慂した裏面史が表はされてゐることは興味深いことである。

未だ見ぬ西の國のことについて、當時の人々が互ひに傳へて信じてゐた事柄も面白い。中にも、コロンブスの義母の事が此の日誌に表はれてゐる。此の義母は其の亡夫の所持品であつたといふ海圖や諸記録をコロンブスに與へ、之れ等を讀んで、益々コロンブスは「西海遠征の熱心を増した」と自白してゐる。歴史家の見逃がすべからざる點である。

## 二

今も昔も、遠洋航海に天文学の助けを借らなければならぬ事は變りない。今ならば海圖や天體曆が立派に出来てゐるから、航海中の天體觀測などは只一定の公式通りにやつてゐて、大西洋を越えるぐらゐは容易であるけれど、四百年余り

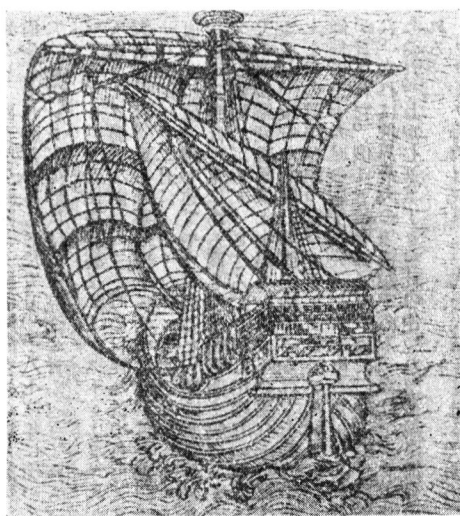
の昔しに、不完全な天體表を頼りまして、何の見込みも無い始めての太平洋横断は、けだし、無暴の舉に評する方が當り前であつたかも知れない。それでも、コロンブスは當時の天文家として最も信用のあるレギオモンタヌスの作つた有名な天體表を携へ、又、可なりの磁針器コンパスを持つて、絶えず觀測し航海を續けたのであつた。

今ならば一週間で横切る太平洋を、コロンブスの船は遅々として帆走し、海圖の示す日本の方向へ幾十日も航海をつゞけて、尙、陸地を見ることが出来なかつた。此の長い日數の中には、毎日、只、水と天との外に見るものも無く、從つて、非常に單調な其の日々であつた事は想像するに難くない。こゝに今或る一日の日誌記事を掲げて見やう。

「九月二十一日、金曜日。終日はさんご靜穩。午后、少しく風加はる。晝夜帆走續行、十三リーグ弱。朝、海面を全く埋めるやうな多くの雜草の浮ぶを見る。之は西より來れり又、ペリカン鳥を見る。海面は河の如く波靜かにして、天氣最上等。鯨を見る、之れ陸地近き兆なり。」

しかし、前途は尙遠かつた。とにかく、毎日少しづつは西へ、ミ、故郷を遠ざかつて行くこいふ心持が、水夫たちの心を暗くするばかりであつた。コロンブスは彼等の心の中をよく知つてゐた。そして、九月九日に至つて、其の日誌に「此の日十九リーグを帆走す。航海の長びくため水夫等の惱

みを思ひ、今後は航走里數を眞實よりも減じて記るす決す」



と記してゐる——それでも此の往航の時は、丁度、海の荒れる時季の後であつたから、歸航の頃に比べるミコロンブスのためには幸福であつたのである。

### 三

十月十一日(木曜日)午后十時頃になつて、コロンブスは甲板から海上を展望中遠方に一つの燈火を見つけ、すぐ、下役のペロ・グチエーレスを呼んだ。するに、ペロも亦此の燈火を認めたので、いよいよ未知の境に近いたことが明らかに船中の一同は蘇生の思ひをした。

翌朝、船を島の岸近く乗り進めた後、コロンブスはスペインの旗を翻して、威風堂々として上陸した。しかし、見て、先づ驚いた事は、島の土人が皆裸體の蠻人に過ぎないで、豫想してゐた黄金國とは全く違つた風土であつたことである。それから、コロンブスは土人の指すがまゝに、「黄金の島」をたづねつゝ、幾多の新島を発見したけれど、結局、ジバングミカタイ(支那)とは見付からず、歐洲へは豫想外れの御土産をもたらしたのであつた。蓋し、今から思へば、當時の天文家たちの見積つた地球の大きさが小さ過ぎ、それに反してアジア大陸が大きく考へられてゐたからであつた。それにしても、此の有名な大遠征が、コロンブスの勇氣と豪膽によつて敢行せられ、前古未知の新世界を発見したことは、いろんな意味に於いて人類歴史上の大記録たるには違ひない。

毎年十月十二日はアメリカに於いて此の大発見を記念するための祭日とされてゐる(一九二四・七・十。米國ハーワード大學天文臺にて)

の製造を始め、以後、特にレンズ磨きの成績に於いては世間に肩を比べる者が無いほどになつた。其の最も近い商賈相手といふのがミュニクのクツク親子(獨逸)ダブリンのクラブ(英國)及びヨークのクツク(英國)であつた。

しかし、彼れの天才が認められたのは此の望遠鏡製造業を始めてから十ヶ年の後であつた。此の十年目に、彼れはW.B.ドリス師といふ當時英國で有名な天文家に知られたのである。

一八六〇年に、ミシシビ大學からクラーク氏へ十八吋といふ口径の

## 三三

望遠鏡を注文した。これは即ち世界第一のレンズよりも尙三吋大きい注文であつた。ところが之れが出来上る前に南北戦争が始まつて、注文主が品を受取る事が不可能になつた。此のレンズは其の後、シカゴの天文學會に賣られ、一八六三年に据付けられた。クラーク會社は各國の大學に望遠鏡を供給した。其中で最も賞讃を博したのはワシントンにある官立海軍天文臺のものであつた。一八七〇年に、世界第一の屈折望遠鏡の製造をクラーク會社に注文するといふ議案が議會を通過した。大きさは二十六吋直径といふので、其の仕事は一八七一年一月から始められた。決定された型式は普通のレンズに用ゐられるよりも遙かに簡單なもので、クラウン硝子は兩凸で、兩面同一の曲率とし、フリント硝子は一面を殆んど平面とし、他の面はクラウン硝子と同じ曲率の凹面とした。一八七二年に仕事は殆んど出来上り、四百呎の距離から顯微鏡的寫眞を觀る試験をした。ところが尙少しく仕事があることになり、一八七三年に至つて遂に据付けられた。此のレンズの形は殆んど完全と言ふべきである。一八七九年、ロシアのブルコフ天文臺の臺長オト・ストルフェ氏が皇帝の代理としてクラーク會社を訪ひ、三十吋の口径を持つ色消天文レンズの製造の契約をした。此の仕事の契約によつて會社は三萬三千弗を受取つた。一八七四年十二月に、カリフォルニアのジェムス・リク氏が其の州の何所かに望遠鏡を建てやうと決心し、遂にサンタ・クララ郡サノセから十三哩ほど東にある高さ四千四百四十呎のハミルトン山を此の天文臺の敷地と定めた。ところが、何も出来ない前にリク氏は死んだので、彼の遺産委員は七十萬弗を以つて必要な土地及び望遠鏡を買ふこととし、政府から廣い地面を拂下げられ、七萬八千弗を以つて山の頂上までの道路を作つた。クラーク會社と契約されたリク望遠鏡の契約條件は三十六吋の硝子といふことであつたが、其れの完成には五年間が費された。價は五萬弗拂はれ、尙其の外、据付試験に一千弗拂はれた。之れは世界最大の望遠鏡である。之れがクラーク氏の最大事業であつた。しかしクラーク會社の作つた望遠鏡は世界至るところに見られる。

クラーク氏の自叙傳は一八七八年に書かれ、書物となつて發表された。其の一部はワイドナー圖書館にある。(山本譯)

(一八の續き)